

2018年6月10日

福音書からのメッセージ

周りに座っている人々を見回して言われた。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」

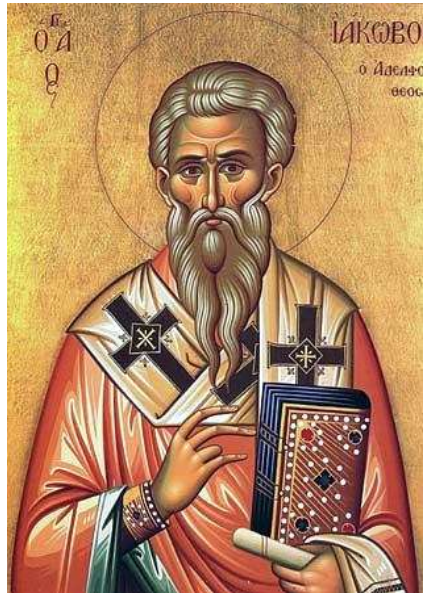
(マルコによる福音書3章34～35節)

イエス様の周りには、彼を頼って多くの人が集まってきました。しかしそこには、イエス様を受け入れることのできない人たちもいたようです。今日の箇所にはそのような人として、「身内の人たち」と「エルサレムから下ってきた律法学者たち」が登場します。

まず身内の人たちが出てきます。彼らはどうしてイエス様を取り押さえようとしたのでしょうか。それはイエス様が「気が変になっている」と耳にしたからです。当時の社会で気が変になるのは、悪霊の仕業だと考えられていました。だから取り押さえなければならないと思ったのでしょう。イエス様は大工の家庭に生まれました。律法学者のように律法を学んだわけではありません。何の権威も持たないのに巡回して宣教し、いやしの業をおこなうイエス様。一番近くにいたはずの身内の人たちにとって、それは信じられない姿でした。

またエルサレムから下ってきた律法学者たちも、イエス様に対して否定的な言動を繰り返します。宗教の中心地であるエルサレムで活動していた彼らは、エリートでした。彼らは律法を詳しく、丁寧に学んでいきます。それは良いことなのですが、自分たちこそ正しいのだという思いが強くなっていきます。だからイエス様の行動が、どうしても許せないのです。

イエス様の周りには群衆が集まってきました。一番近くにいたはずの身内でもなく、また自分たちこそ正しいと思っていた律法学者でもなく、ただイエス様を頼って



きた群衆がそこにはいました。そしてイエス様は彼らに、関わっていかれるのです。聖書はイエス様が漁師や徴税人を弟子にしたこと、病気の人や悪霊に取りつかれた人たち、また罪人や娼婦といった、

社会の隅で誰にも相手にされない人たちのところに行き、寄り添い、手を差し伸べられたことを報告します。

「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる」。

イエス様のこの言葉は、いわゆる血縁関係による身内に対してではなく、群衆に対して語られました。本当の家族がここにある、神の家族とはこのようなものだ。イエス様はそのような思いで、語ってくださっています。群衆は特別なことをしたわけではありません。彼らは、ただじっとそこにいて、イエス様のそばにいて、その声に耳を傾けていました。神さまにすぎるしかない、その思いしかありませんでした。

わたしたちは神の家族でしょうか。イエス様にすべてを委ね、頼り切っているのでしょうか。イエス様のみ言葉に聞くということ、それこそが「神の御心」なのだと思います。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>